

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：32681

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26560150

研究課題名(和文)乳幼児の心理的発達に関わる美術館における鑑賞プログラムの分析と開発

研究課題名(英文) Analysis and development of art appreciation programs in art galleries relating to the psychological development of babies and young children

研究代表者

杉浦 幸子 (Sugiura, Sachiko)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：90635955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：「超初期学習者」である乳幼児の心理的発達に、「美術館」環境、「アート作品」、それらに関わる「人」が寄与すると仮定し、それらが発する情報を乳幼児が取得する教育プログラムをデザイン・実施し、彼らの反応を映像記録し、保護者、主催者から聞き取りを行った。その結果、主に次の3点が観察できた。乳幼児は、1.色や線、形といった造形要素、照明、床、家具といった建築的要素、周囲の人的刺激に反応する、2.反応に個人差がある、3.過去の経験や記憶と受けた刺激を関連づけている可能性がある。そこから、「美術館」は乳幼児の心理的発達に寄与する可能性があるとし、成果を印刷物にまとめ、国内の美術館、自治体に配布・共有した。

研究成果の概要(英文)：The researchers presupposed that art galleries, art works and people who relate to them can contribute to the psychological development of babies and young children, "ultra-early learners" between 0-3 year-old, and designed and implemented educational programs to expose them to those factors, recorded their reactions in moving images and made questionnaire to the parents and the people of art galleries. As the result, 3 points were observed; 1.babies and young children reacted artistic factors such as colors, lines and forms, architectural factors such as lighting, flooring and furniture and the stimuli from people in the circumstance, 2.the reactions differ individually, 3. they possibly related their past experiences and memories to the stimuli obtained in the programs. Based on them, the researchers thought "art galleries" can contribute to the psychological development of babies and young children and made a leaflet to share the results with art galleries and local governments.

研究分野：美術館教育学

キーワード：鑑賞教育 乳幼児教育 アート 美術館 実験心理学 動画記録 保育園

1. 研究開始当初の背景

(1)1970年代から、乳幼児の心理的発達と認知について活発に研究が行われるようになり、子どもの脳は胎内で形成されて以降、3歳までに約80%が完成し、その脳がその後の生育と心の育みの基盤となること、また乳幼児も視覚を始めとする五感からの刺激を受け取り、さまざまな学びを行うことが明らかにされてきた(山口、2006)。

(2)一方、王侯貴族、教会といった旧支配層が保有していたコレクションが、18世紀後半の市民革命、近代社会の成立を経て、公衆の共有財産であるという認識を可視化し、実体化する装置としての美術館が成立し、学習資源としての美術館の認識が育まれる中、20世紀に入ってからは、欧米の美術館を中心に、美術作品の鑑賞や、美術館という場、美術館やアート作品に関わる人とのコミュニケーションを活用して、各人の生涯学習を支援する社会教育機関としての美術館の機能に対する認識が高まった。

(3)日本国内では、教育機能としての博物館という認識に比して、教育機関としての美術館という意識がなかなか育まれなかったが、1980年代頃より教育機関としての美術館の有用性に対する意識が高まりはじめ、「教育普及」という名の元にプログラムデザインが行われるようになった。最初期は、造形活動を通じた教育プログラムが主流であったが、1990年代後半に、海外の美術館教育活動に刺激を受け、作品鑑賞を軸とした教育プログラムが各所で行われるようになってきた。

(4)作品鑑賞を軸とした教育プログラムは、小学生から中学生、また成人を対象としたものが多かったが、2001年に行われた第1回横浜トリエンナーレにおいて、国内で初めて、乳幼児を連れた保護者を対象にした鑑賞プログラムが行われ(杉浦、2001)。その後、森美術館パブリックプログラムの中でさらに展開され、(杉浦、2003-2004)、水戸芸術館現代アートセンターなどで、同種のプログラムが散見されるようになった。

(2)しかしながら、その後現在まで、全国の美術館において、乳幼児を連れた保護者向けのプログラムの数は多くない。また、上記のプログラムは、乳幼児を対象とするのではなく、乳幼児を連れた保護者の鑑賞をサポートすることに重点が置かれ、アート作品鑑賞や美術館空間、そこに関わる人々から、乳幼児自身にどのような刺激・情報を受け、学びを行う可能性があるかについて、検証する研究はいまだ行われていない。

2. 研究の目的

(1)上で述べた状況を背景に、本研究では、80年を超える生涯学習のタイムスパンの中で、学びの萌芽期であり、かつ、急速な発達期である「0歳から3歳」までの乳幼児を「超初期学習者」と捉え、日常生活で受ける刺激・情報とは異なる刺激・情報を提供する「ア

ート作品」、アート作品を所蔵・展示する「美術館」、そこに存在する「人」から彼らが情報を得ることが、乳幼児の発達にどのような影響を与えるかを明らかにする。

(2)研究を通して得られた知見や成果を、ウェブサイト、印刷物、書籍、講演などを通して、広く共有し、アート作品、美術館、美術関係者が乳幼児から成人に渉る生涯学習の基盤形成に重要な役割を果たすことを明らかにする

特に次の2点に重点を置く研究デザインを行う。

1. 乳幼児が五感でアート作品を鑑賞する美術館教育プログラムが彼らの発達に与える具体的効果を、プログラム実践と観察、記録を通して、検証
2. 乳幼児の発達をさらに促進する、乳幼児向け美術館教育プログラムのシステム設計とその普及のためのシステム構築

3. 研究の方法

(1)本研究は、毎年、研究テーマに関心を持ち、協働を希望する美術館2-3館と連携し、乳幼児を対象とした美術館における鑑賞プログラムを実施する。それぞれの館ごとに、作品、展覧会、環境設定などからなる特徴を見出し、各回ごとに異なる観点を含んだプログラムデザインを行うよう工夫する。各プログラムごとに、調査(investigation)・研究(research)、計画(plan)、実行(practice)、検証(evaluation)、共有(communication)を繰り返し、プログラムの精緻化を行うという、PDCAサイクルをさらに発展させた、IRPECサイクルでのプログラムデザインを行う。

(2)全てのプログラムで動画および静止画撮影を行い、言葉で記録することができない乳幼児の行動を観察ベースで分析するデータを取得するとともに、そのデータを活用し、ドキュメンタリー映像を制作し、ウェブサイトで公開する。

(3)最終年度には、成果の蓄積をまとめ、共有するためのリーフレットを制作し、全国の美術館や自治体といったプログラムに関係する機関に配布・公表を行う。

4. 研究成果

(1)先行事例のリサーチ

「1.背景」で挙げた先行事例の他に、平塚市美術館、茅ヶ崎市立美術館、ちひろ美術館・東京といった、実践例を取材し、プログラムのプロセスの観察、企画実施者、運営者、参加者へのインタビューなどを通して、乳幼児を対象とした鑑賞プログラムをデザイン・実施する上での重要事項の洗い出しを行うことができた。

(2)乳幼児を対象とした鑑賞プログラムのデザインの精緻化

先行事例の分析を参考にしながら、計7館(内1館は商業ビル内のアートセンター)と、カ

スタムメイドの鑑賞プログラムを企画・実施することを通して、「乳幼児」のためのプログラムデザインをより精緻化することができた。参加者、保護者、美術館、作品が常に変化することから、プログラムデザインにおいては、さまざまな変数をフレキシブルに考慮する必要があることが認識され、それをベースにプログラムのフレームと運営をデザインし、ブラッシュアップを繰り返すことで、ある程度のプロトタイプデザインを作成できたことが大きな成果であると言える。下記がプログラムデザインに関わる主要な要素である。

- ・ フレームワークのデザイン
 - 実施日時やプログラムの長さ
 - プログラムタイトルの決定
- ・ 下見
 - プログラムに使用する作品の選択
 - 動線の確認
 - 照明、床材、インテリアなど美術館空間内の要素を確認
 - 館へのアクセスの確認
 - 授乳、オムツ替えスペースの確認
- ・ プログラム告知および参加者募集
 - ホームページ、SNSなどの活用
 - 参加者データ（氏名、月齢）の確認
 - 受付方法の確認
- ・ 事前準備
 - サインの設置
 - 現場スタッフとのコミュニケーション
- ・ 鑑賞プログラムの実施
 - 乳幼児の興味・関心から動線を決める
 - 保護者が身体的・心理的に安心できる環境を整える
 - 行動分析・検証・共有のための記録を取る
- ・ 振り返り
 - インタビューやアンケートによるフィードバックの取得
 - 参加者同士のコミュニケーション
 - 内容、運営、両面に関する関係者の意見だし

(3)美術館における鑑賞プログラムから乳幼児が得ることのできる可能性がある影響の洗い出し

プログラム現場での観察、また、記録映像を通して、すでに心理学実験から見出されていた成果を検証を行った。また、特に「美術館」という場で行うプログラムならではの乳幼児への影響についても、個体差がある、数値化したデータは得られていないという限界はあるものの、ある程度の可能性を洗い出すことができた。

- ・ 原色などはっきりとした色に反応を示す
- ・ 人物の顔の表現に反応を示す。特に目がはっきり描かれていると反応する
- ・ 立体的、また、動きのある作品に反応する

- ・ 作品以外の美術館空間の構成要素に反応する。例えば、照明、鏡、床材、椅子などのインテリアなど。
- ・ 言葉での反応はないが、喃語や体の動きで感情を表す。日常生活では見られない反応を示すことも多い。

また、プログラム中に就寝する場合もあった。通常の疲労に加え、五感に訴えるさまざまな情報に取り巻かれた中での活発な情報取得による疲労、プログラム化され、守られているということによる保護者の安心感の伝播など、いくつかの理由が考えられる。プログラムの評価ポイントとして、考慮すべきであると考えられる。

(4)多様なメディアを採用した記録と成果共有

言葉を発しない参加者の反応を検証する、消えてしまう「こと」のデザインである鑑賞プログラムを固定化する、成果を他者に共有する、といった、本研究に特有の点から、時間と空間を記録することができる「動画記録」が非常に重要であることがわかった。また、乳幼児がカメラのレンズに対し非常に興味を示すことから、彼らの意識を引かないデバイスのリサーチと使用を通じた検証を行うことが乳幼児研究において非常に重要であることもわかった。

また、成果を共有し、乳幼児向けの鑑賞プログラムを全国の美術館に普及するために、視聴に時間がかかり、専用の機器が必要となる場合のある動画記録のみに頼るのではなく、文字データと写真データからなり、持ち運びができ、簡単に情報を共有することができる「印刷物（リーフレット）」というメディアを採用した。使用する色、フォント、レイアウトなどデザインについては、リーフレットを見る美術館関係者、乳幼児の保護者に、鑑賞プログラムの成果と魅力が身体的・心理的に伝わり易くする、いうことを最重要項目として行った。実質的效果については、今後検証を行っていきたいと考えている。

(5)異分野の専門家との連携の創出と強化

本研究を通して、心理学や先端的なテクノロジーデバイス開発者など、異分野の専門家とのつながりを生み出すことができた。乳幼児から高齢者まで、生涯学習を基軸にアート作品の鑑賞における鑑賞者の心理的变化を考えることは今後ますます重要性を増す。今回の協働から新たな知見をいただくとともに、今後の研究への発展的展望を持つことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

みつひろみ、助産雑誌、東京都庭園美術館「赤ちゃんとおさんぽ」に参加して、

70 卷、2016、pp1029-1031
三澤一実、日本美術教育研究論集 no.49、
造形批評力獲得のためのプログラム開発、
査読あり、49 巻、2016、pp.155-162

〔学会発表〕(計 8 件)

- 杉浦幸子、所沢市立三ヶ島中学校教員研修会、作品と人の出会いを生み出す 朝鑑賞から生まれる学びの連鎖、2017、所沢市立三ヶ島中学校
- 杉浦幸子、沖縄県立美術館ボランティア研修会、美術館で行う鑑賞教育、2017、沖縄県立美術館
- 杉浦幸子、十和田市現代美術館、コミュニケーションを育む鑑賞教育、2017、十和田市現代美術館
- 杉浦幸子、社会福祉法人金光福祉会ふじおか中央こども園講演会、ようこそ！そうぞう力を育むアート鑑賞の世界へ、2017、藤岡公民館
- 杉浦幸子、京都服飾文化研究財団、博物館実習、学ぶ、生きる場としてのミュージアム、2016、京都服飾文化研究財団
- 杉浦幸子、三木美裕、安齋聡子、museum 2015、利用者と展示を結ぶ、2015、明治大学
- 三澤一実、公益社団法人日本美術教育連合、造形批評能力獲得のためのプログラム開発、2015、東京家政大学
- 杉浦幸子、東京都現代美術館、赤ちゃん和艺术を楽しもう、2014、東京都現代美術館

〔図書〕(計 6 件)

- 杉浦幸子、岡本太郎美術館 2017 年度教育普及記録集、未来を作る人たちのための挑戦、2017、(印刷中)
- 杉浦幸子、三澤一実、山口真美、武蔵野美術大学、赤ちゃんといびじゅつかん、2018、8
- 杉浦幸子、三澤一実、米徳信一ほか、旅するムサビ in 台湾、武蔵野美術大学国際交流助成金、2017、42
- 杉浦幸子、三澤一実、米徳信一ほか、旅するムサビ in 台湾、武蔵野美術大学国際交流助成金、2016、3
- 杉浦幸子、金子伸二ほか、武蔵野美術大学出版局、ミュゼオロジーの展開、2016、379 頁中 36 頁担当
- 杉浦幸子、三澤一実、米徳信一ほか、武蔵野美術大学出版局、美術教育の題材開発、2014、431 頁中 22 頁担当

〔その他〕

- ホームページ等
武蔵野美術大学芸術文化学科研究室ホームページ「赤ちゃんといびじゅつかん」
<http://apm.musabi.ac.jp/research/baby/>

東京都現代美術館「ワンダフルワールド

展」乳幼児鑑賞プログラム「赤ちゃんからの家族鑑賞プログラム」

<http://www.mot-art-museum.jp/blog/staff/2014/08/88.html>

東京都現代美術館「ワンダフルワールド展」講演会「赤ちゃん和艺术を楽しもう」

<http://www.mot-art-museum.jp/blog/staff/2014/08/post-262.html>

パナソニック汐留ミュージアム「パスキン展」乳幼児鑑賞プログラム「パスキンといびじゅつかん」

<https://panasonic.co.jp/es/museum/exhibition/15/150117/#event>

川崎市岡本太郎美術館「遊びひろく岡本太郎展」乳幼児鑑賞プログラム「あかちゃんとおさんぽ」

<http://www.taromuseum.jp/current.html>

スパイラル「スペクトラム展」乳幼児鑑賞プログラム「赤ちゃんといびじゅつかん」

http://www.spiral.co.jp/e_schedule/detail_1590.html

東京都庭園美術館「こどもとファッション展」乳幼児鑑賞プログラム「あかちゃんとおさんぽ」

http://www.teien-art-museum.ne.jp/exhibition/160716-0831_children.html

川越市立美術館「名品と出会う展」乳幼児鑑賞プログラム「五感でアート」

<https://www.city.kawagoe.saitama.jp/artmuseum/tokubetutenji/toku-kako/2017-2.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 幸子 (SUGIURA Sachiko)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：90635955

(2) 研究分担者

三澤 一実 (MISAWA Kazumi)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：10348196

米徳 信一 (YONETOKU Shinichi)
武蔵野美術大学・造形学部・教授
研究者番号：80240381

(3) 連携研究者

山口 真美 (YAMAGUCHI Masami)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：50282257